

# 『少室六門』と『達磨大師三論』

椎名宏雄

## 一 問題点

本邦において、古くから達磨の語録として伝えられる叢書に、『少室六門』（または『少室六門集』）と『達磨大師三論』（または『初祖三論』『少林三論』など）の一書がある。周知のように、

前者は「心經頌」「破相論」「二種入」「安心法門」「悟性論」「血脈論」の六種、後者はこのうちの「血脈論」「悟性論」「破相論」の三種を、それぞれ別個に編集した語録集である。前者の方がより一般的であり、本邦禪門でかなり流布したことには、その開版の回数<sup>(1)</sup>や末疏の存在からも明らかである。

これに対して、後者の『達磨大師三論』は、五山版や古活字版が存在したにもかかわらず、文献的にこれを注意した人は、かの無著道忠（一六五三—一七四四）を指していない。彼の業績は後述するが、一般に、『三論』は『六門』中に含まれるという見解が先行したためか、近世における『六門』の流

行とともに全く忘れ去られたようで、諸家の関説記事すらほとんど存しない。かくて、『三論』は巷間に影を没し、古版はいたずらに希観書として死蔵され、今日にいたるまで学問研究の対象にすらなされていない。

一方の『六門』は、近年における敦煌文献の研究が、必然的に初期禪宗関係のすべての文献資料に対して、根本的な検討を要したために、既存の資料としては最も早くから注目されたことは、当然ながら幸いであった。

その結果、『六門』中の「破相論」「二種入」「安心法門」の三種には、該当する敦煌文献が少なからず存することがまず注目された。就中、「破相論」が「觀心論」の書名のもとに、唐代に権威ある入藏をとげた北宗神秀の撰述であることが、神尾式氏によつて立証されたのは一九三二年であった。<sup>(2)</sup>そして、二年後の禪氏祐祥氏による「少室六門集に就て」なる論文<sup>(3)</sup>は、朝鮮刊行の『禪門撮要』本をも加えて、『六門』全体

に対する本格的な文献研究の出発であつたといえる。

かくして、以後における“六門”個々の書に関する個別的な研究の累積により、現今では、六門のほぼすべての資料が、菩提達磨を初祖とする初期禅宗の人々によつて主張された語録なることが明らかにされている。もつとも、六門の一部が達磨の教説でないことは、すでに近世初期の義諦が『禅籍志』<sup>(4)</sup>において、「心經頌」が玄奘訳に対する未疏なることを指摘するなど、古くから注意されていたことも事実である。

しかしながら、ここで注意すべきことは、近代の学問研究の灯火を当てられた結果、『六門』はこうした特殊な性格をもつ反面、六種の文献がすべて古い伝承をもつことが確認された点にある。先学の検討によれば、それぞれの文献の成立は、少なくとも禅宗成立期、つまり唐代中期以前であるという。

いうまでもなく、これは敦煌文献と並んで、禅宗語録の最古層を示める。しかも、新出文献との最大の相違は、禅門で長く流布してきたことの一点にあり、禅籍においてはすこぶる重要な意味をもつ。禅門における伝統的古資料は、かならず後世の禅語録を生む母胎をなすからである。こうした点で、『六門』は『六祖壇經』とともに、初期禅宗資料中の双璧といつてもよい。それは、從来未知の敦煌文献等と、資料的価値観の上でまさしく対照的な立場にある。

かくして、『六門』は新たな視点から読み直されなければ

ならない。そのためには、より確かなテキストによらねばならない。この点、「破相論」には鈴木大拙氏による五本対校の労作があり<sup>(5)</sup>、「二種入」には柳田聖山氏により、これを含む『二入四行論』の訳注書が公刊せられ、現存する異本全体の校訂もまた進められているという。<sup>(6)</sup> いずれも、斯界を裨益すること大なるものがある。

しかし、『六門』そのものの書誌的な検討は、つい最近まで五山版の存在が知られず、また、『三論』の書誌的検討を怠つたために、『六門』は『三論』を増集した近世の編集となす誤解がなされてきた。甚だしきは、正統藏經中に、四門と二門が別個に収録されているものに対して、『六門』を分断載録したとみるがごときは、禅籍の文献研究の遅れを曝露するものでさえあつた。こうした実状に鑑みて、駒大所蔵の『達磨大師三論』を底本とし、これを他の異本二種、『六門』の古本二種、『禅門撮要』本、円続藏本、および「悟性論」の古鈔を加えた合計七種の異本と対校して活字化したのが、本誌第八号に掲載した拙稿「諸本対校『達磨大師三論』」にほかならない。この作業は、いうまでもなく、先聖無著道忠師の労作に学びつつ、基本的には師と同じ意図に立つものに過ぎない。異なるものは、師が『少林三論』なる校訂本を遺したのに対しても、筆者は三世紀の余も上梓されぬ『三論』の資料的価値を重視して、これを五山版の原本に忠実な翻刻に努めた点である。

ところが、無著師や鈴木氏の労作に拙稿を加えて、なお『六門』個々の文献の書誌的な関係は、かならずしも明瞭とならない。それは、該書のもつ前述のごとき性質に由来するからであろう。しかし、そののち筆者は、更に新たな三種の古写本を閲する機会に恵まれた。したがって、以下の小稿においては、まず『六門』と『三論』そのものの書誌的考察を行なつておきたい。そして、その過程において『禪門撮要』

本や単行の諸資料にも関説し、次いで無著師の業績を紹介し、現段階において知られる『六門』と『三論』との諸本間の関係について考えてみたいと思う。おかげの御批判をいただければ幸甚である。

## 二 『少室六門』

『少室六門』は、元來、成立の異なる六種の文献の集成であるから、本書の書誌的事項を検討する場合、常に他の叢書や単行資料にも留意しなければならない。したがって、六門の一つが各叢書中に、どのように収録されているかを一覧したのが次頁の表である。

叢書は主要な四種とし、最古刊本による。便宜上、『少室六門』の収録順を基準として配列し、各叢書中における各門の名称と主たる内容等を示した。A B等は叢書中の収録順を示し、「」内は各門の小見出しである。

現在知られる『少室六門』の異本は左記のとおりである。ただし、明治期以後の単行書は省略する。（）内は所蔵者である。

①五山版（六地藏寺）

②江戸初期写本（内閣文庫）

③江戸期写本（河村孝道氏）

④無刊記本（駒大）

⑤正保四年八一六四七▽刊、江戸佐太郎（駒大）

⑥寛文七年八一六六七▽刊（駒大）

⑦延宝三年八一六七五▽刊、秋田屋五郎兵衛、鼈頭本（駒大）

⑧大正藏四八八一九二八▽

まず①は、昭和四年に平泉澄氏によつて、真義真言宗六地藏寺（茨城県東茨城郡常澄村六反田）より発見された現存唯一点の貴重な五山版である。ただし、本書に書誌的な検討が加えられて世に紹介されたのは、そののち三〇余年を経て、阿部隆一・川瀬一馬氏等の力によるものである。<sup>(8)</sup>

本版の書冊形式等の書誌については、すでに両氏の紹介に詳しい。それによれば、本書は鎌倉末期から南北朝初期頃の中世初期に刊行された精刻の覆宋版であるという。ただし、序文は存在せず、惜しむらくは巻末を欠くため、刊記・跋文等の存否もまた確認できない。文章字句を流布本と比較すると、概して略字・俗字が多く、また異同も少なくない。就中、

書名	叢書	少室六門(五山版) ~ 1300	達磨大師三論(五山版) 1387	禪門撮要 1907	正統藏經 1911
(一)心經頌		「第一門心經頌」 1本文	「達磨大師破相論」 1序(無名僧) 2本文	「菩提達磨四行論」 1本文 〔第一入道修行綱要門が二種入に該當、以下第四十四門まであり〕	「菩提達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 2本文
(二)破相論		「第二門破相論」 1本文	「觀心論 初祖達摩大師說」 1本文	「菩薩達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 2本文	「達磨大師破相論」 1本文
(三)二種入		「第三門二種入」 1本文 2偈(四言八句)	「菩提達磨四行論」 1本文 〔第一入道修行綱要門が二種入に該當、以下第四十四門まであり〕	「菩薩達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 2本文	「少室六門集「第一門心經頌」」 1本文
(四)安心法門		「第四門安心法門」 宗鏡及正法眼藏載之 1本文 2偈(四、七言四句、六言四句)	「達磨大師悟性論」 A 「達磨大師血脈論」 1序、紹興23年(1153)任哲撰 B 「達磨大師悟性論」 1序、銀海撰 C 「達磨大師悟性論」 1序、任哲撰 D 「達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 E 「初祖達磨大師安心法門附」 出聯灯会要 F 少室六門集「第一門心經頌」 1本文	「菩薩達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 2本文	「少室六門集「第一門心經頌」」 1本文
(五)悟性論		「第五門悟性論」 1本文 2夜坐偈(七言四句)	「第六門血脈論」 A 「第六門血脈論」 1偈(四言五句) B 「第六門血脈論」 1偈(四、伝法偈、五言四句) C 「第六門血脈論」 1偈(四、伝法偈、五言四句) D 「第六門血脈論」 1偈(四、伝法偈、五言四句) E 「第六門血脈論」 1偈(四、伝法偈、五言四句)	「菩薩達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 2本文	「少室六門集「第一門心經頌」」 1本文
(六)血脉論		「第六門血脉論」 1本 文 2本 文 3頌(四、伝法偈、五言四句) 4偈(四、伝法偈、五言四句)	「第六門血脉論」 1本 文 2夜坐偈(七言四句) 3真性頌(單純) 4頌(四、心心心の偈) 5偈(伝法偈)	「菩薩達磨大師略弁大乘入道四行觀」 1序 2本文	「少室六門集「第一門心經頌」」 1本文

最大の形式的相違は、第一門「心經頌」の文中、頌の直前の語句に続いて、からだす「頌曰」の二字が存することである。

江戸期の刊本には、これがまったくみられない。いったい、「心經頌」のテキストは、日下のところ、『六門』本のほかには、後に述べる『新刊懸吐禪門撮要』所収書を知るのみである。ゆえに、五山版出現の最大の価値は、この「心經頌」の現存最古の資料を提供することにある。

さて、この五山版の巻末には、元来跋文や刊記が存していたのであらうか。この疑問に応えるのが、②の内閣文庫本である。本書は江戸初期の古鈔とされるが、雄渾美麗な文字で筆写され、全文に原筆者による返り点・送りがなが付されている。

表紙と本文巻末には「昌平坂  
学問所」、巻首には「林氏  
<sup>(9)</sup> 藏書」「江雲渭樹」

等の古印が押される。「江雲渭樹」は林羅山（一五八三—一六五七）の蔵書印であるから、本書は内閣文庫蔵書の源流をなす、最古層の部類に属する貴重な古写本であることが知られる。

注目すべきは、本書の書写の形式であり、毎半葉一〇行、毎行二〇字（稀に二一宇）の行格はもとより、文章のほほ一

字一句すべてが五山版と一致する。前述の「頌曰」もまた等しい。かくて、本古鈔は、五山版にもとづく忠実な贋写本と断ぜられる。しかるに、首尾完全であるにもかかわらず、序跋・刊記・識語等の類は一切存しない。このことは、五山版そのものが、刊記はともかく、少なくとも序跋の類は当初か

ら存在しなかつたことを推察せしめるものである。そして、この推定を助けるのが、③の写本の存在である。

③は駒大教授河村孝道氏の所蔵にかかる、近世中期ごろの書写かと推定される筆写本である。本書は『少室六門』の内題を有し、表紙裏には「安養寺」、裏表紙裏には「善普（花押）」なる署名があるが、ともに不詳である。ただ、『六門』の全文に引続き、「東陽朝禪師小參」「勸參禪門」「坐禪」「達磨忌偈愚堂和尚」等が同筆で連写される。ゆえに本書は、美濃の大仙寺開山、東陽英朝（一四二八—一五〇四）と、同寺中興の愚堂東寛（一五七九—一六六一）の門流に属する僧、すなわち臨濟宗妙心寺系統の学僧により。江戸初期と中期ごろにかけて伝写所持された書写本であろう。

本書は、毎半葉一三行、毎行一九—二四字と不定ではあるが、字句を①の五山版と比較すると、これまたほほ等しい。序跋の不存、「頌曰」の存在、という①の特徴もまた同様である。かくして、本書もまた、直接か間接かは不詳ながら、五山版にもとづく贋写本とみてよい。

かくして、五山版は、元來序跋等をもたぬ覆宋版なることが立証されるであろう。この五山版の発見は、從来知られなかつた宋版が存在したことを示唆し、したがつて、本書『六門』が宋代の編集なることを知らしめる点において、きわめて貴重な価値を有するものである。

次に、④⑤⑥⑦の江戸初期における刊本は、いわゆる流布本であるが、文字語句はほぼ全同である。就中、④の駒大蔵本（忽一〇七）は無刊記であるが、⑤の正保版と行格が一致し、⑥の寛文版、⑦の鼈頭本とは異なるから、流布本中では古版に属する。なお、『江戸時代書林出版書籍目録集成』によれば、本書の開版はほかにも何度かなされたようであり、

近世における流行の様子を知らしめる。しかし、内容的にはおそらく④～⑦と同文とみられ、その④～⑦が、①の五山版とは字句の異なること、前述のとおりである。このことは、近世における『六門』の最初の刊行者は、五山版に基づきつ、字句を整理して読みやすくし、これを後刊本がすべて踏襲していることを示唆するものである。

ところで、⑧の正蔵本は④～⑦の流布本類と全同ではないことが注目される。文字に若干の異同が存する。正蔵本の底本は、宗教大学所蔵の江戸時代刊本と明記されるのみである。したがって、この底本は④～⑦とは別系統の刊本か、または④～⑦の流布本系統によりながら、これを校訂したものと考えざるをえない。かくて、『少室六門』の正蔵本を安易に資料として用いるのは、問題であることをまず指摘しておきたい。

### 三 『達磨大師三論』

『少室六門』なる名称は、駒沢大学図書館に所蔵され

る至徳四年（一三八七）刊行の、五山版の題簽墨書にみられる書名である。本書は、内題がなく、巻末刊記によれば、

右、『初祖三論』を鋟梓し、以て伝うるを寿す。伏して願わくは、列祖の血脉流通して、群に性相の融摠あらんことを。  
版を臨川の三会院助縁中に留む。

維、至徳丁卯の秋、釈善觀、謹しんで記す。（原漢文）

とあり、元来、「初祖三論」と称される京都の臨川寺版にほかならぬ。前述のとく、無著の校訂本では『少林三論』となり、また、『新纂禪籍目録』では『達磨三論』なる表記を用いる。このように、本書は従来さまざまに呼称されるが、筆者は直截簡明な駒大本の題簽をとり、『達磨大師三論』の書名で呼ぶことにしたい。

本書の異本類は、次の六種が知られる。

①至徳四年～一三八七▽刊、五山版、京都臨川寺（駒大、慶大）

②天文二年～一五五二▽写本、舜濟慶林筆（大谷大）

③天正一八年～一五九〇▽写本（東北大）

④室町期写本、慶長二年～一五九七▽識語（河村孝道氏）

⑤元和・寛永中～一六一五～一六四四▽刊、古活字版（大東急文庫、成寶堂文庫）

⑥享保二〇年～一七三五▽写本、無著道忠自筆校訂本（妙心寺竜華院）

①の五山版が上梓された至徳四年といえば、春屋妙葩（一三一〇—一三八八）を中心とする五山版開版の最隆盛期にあたり、しかもその中心地たる臨川寺の刊行という栄誉ある一書であつた。<sup>(10)</sup>駒大蔵の本書は、線装袋綴で一冊。左右双辺、有界、半葉一一行二〇字。表紙と巻末に「柳杉浦氏  
居蔵書記」「三  
小汀文庫」「小汀文庫」の蔵書印が存し、杉浦丘園文庫→小汀文庫→駒大、という所蔵者の変遷経路が知られる。

本書の形式的特徴は、『六門』と比較して、『三論』の各書ごとに序文が存すること、本文字句の中に割行文字や無刻の部分が少なからずみられること、などである。

まず、序文類については、巻頭の「血脉論」は、右朝奉郎通判建昌軍事見獨老人任哲による紹興二三年（一一五三）の撰、次の「悟性論」は常樂院銀海の、末尾の「破相論」は無名僧による各撰述で、ともに年記は存しない。これらの三序中、他の『六門』や叢書・単行書中にまつたくみられぬものは銀海の一文で、この存在は貴重である。

ところで、「血脉論」の序者を五山版では「任哲」とするが、②の大谷大学蔵の古写本では「任作哲」とある。しかるにいま、江西省の『建昌府志』（光緒五年～一八七九▽刊）の卷六、秩官表郡官の項によれば、『正徳志』なる文献を引き、「紹興間、通判無可考者九人」として九名の通判の名を掲げる中に、「江作哲」なる名がみいだせる。建昌軍は宋代に置か

れた江西省南城県の地名であり、紹興年間ににおける建昌の通判という一致性をみれば、この『正徳志』のいう「江作哲」こそは、まさしく「血脉論」序文の撰者にほかならない。「江」と「任」は、いずれかの誤記であろう。

ともあれ、すでに『正徳志』の知らぬ彼の伝記を、いまは知るすべもない。ただ、この人が禅家の諸説に詳しい地方官吏であったことは、その文意から明らかである。「見獨老人」なる別号も、参禅の居士なることを思わしめる。文中、最も注意すべきは、「ただ達磨の血脉論、ならびに黄蘖の伝心法要の二説ありて、最も至論となす」の言である。おそらくは、彼がこの二書を合して紹興二三年（一一五三）に上梓せんとした際の一文とみられるからである。②の大谷本には、『三論』とともに『伝心法要』が合綴される。しかも、この『伝心法要』は、『最徳伝燈錄』卷九に所載されて古形をとどめるテキストにほかならない。してみれば、大谷本は任哲の時の宋版か、またはこれを承ける系統の古鈔本と見るべきかも知れない。

「悟性論」の序者、銀海については不詳である。ただ、任哲のいた建昌軍の地方誌である『南城縣志』（同治二二年～一八七三▽刊）卷二之六、寺觀塔附の項に、「常樂院四十  
九都」なる記載がみられるから、この寺の住持であった人かも知れない。この序文中にもまた、震旦第一禪師が「非迷の迷を憫れ

みて、不悟の中に悟性の指を捧ぐ」とあり、この「悟性論」

を上梓する目的で付した序文とみてよいであろう。

末尾の「破相論」の序は、実は正規の序文ではなく、文中、「達磨和尚、かの迷津を懲れみて破相論を説く。無名僧、言下に抄録し、後に学ぶ者をして、無相の心を見せしむ」主旨を中心とする前文のごときものである。この前文は、②の大谷本『三論』や金沢文庫所蔵の古写本等にもみられる。なお、五山版の「破相論」末尾には、『六門』系統に存する「我本求心心自持」以下の七言八句の偈文が存しないことも注意しておきたい。

次に、五山版『三論』の本文中に多くみられる割行文字・無刻部分について考えておこう。この奇妙な現象は、特に「悟性論」中に顕著である。たとえば、第九節中には、

若断惑(五字分無刻)成道<sub>報者</sub>身仏也。

とある。こうした無刻部分が、他の諸本では文字が存することから推せば、五山版は決して善本ではないことを知らしめる。しかし、反面その依った原本が、すでに磨滅虫損などのある古版であり、これに忠実な覆刻なることを示唆する点に、五山版の価値を認めるべきであろう。

次に、②はすでに閲説した大谷大学所蔵本で、『三論』に引き続き『伝心法要』を含綴する。巻末には次の墨書識語が存する。此論、何点雖不如意也、任本書写之後、見之人取捨之。

于時天文廿一<sub>壬子</sub>年九月十一日 於相州淨土寺書寫之草  
沙門舜濟慶林(花押)

右の識語によれば、本書は天文二二年(一五五二)に相州の淨土寺で舜濟が書写した古鈔本である。右文にいう「不如意」とは、達磨の教説としては問題があるという意味か、または善本とはいえぬという意味かが不詳であるが、原本に忠実な謄写という態度がうかがえる。

本書は、それぞれ序文を付した三論が、「破相論」「血脈論」「悟性論」の順に置かれる。この順序は、他本にはまったくみられぬ独自のものであるが、またその配列の必然的な理由もみいだし難い。内容的な特徴は、本誌前号の対校によつて明瞭なごとく、文字語句が五山版と大きく相違すること、この相違箇所が前述の五山版『六門』本に多く一致する事実などである。

文字の異同はさておき、文章の最も大きな異同点をあげてみよう。たとえば、「悟性論」の第一二三節と一四節の部分が、五山版『三論』では左記の a b c d の順序をとる。

(13) 「問、如溫室經說……洗浴之法」——a

「故仮世事……能解悟」——b

「其溫室者……非仏說也」——c

(14) 「問、經說……何憂不達」——d

しかるに、大谷本と五山版『六門』本は、この部分が d — a

—c—bという順序となつてゐる。ちなみに、近世以後の流布本『六門』本もまたこれに等しい。このことは、大谷本が五山版『三論』と、五山版『六門』本との中間的な存在であることを見示すものである。

いつたい、右の引例個所は、文脈的にいざれがより正しいかを見るに、「悟性論」全体の文章構成からすれば、五山版『三論』における配列の方がより自然的である。すなわち、まずaは、一二節において礼拝・持齋等の種々の功德に対し觀心の一法のみを説くことの説明に続く一三節の冒頭で、觀心の法が温室経所説の衆僧洗浴の功德に相應するか、といふ問い合わせに対する答えの首部である。bはこれに接続して、浄水等の七事による供養功德をのべ、cは温室が即身であるから、智慧の火で淨戒の湯を温ため、身中の仏性を浴し、上述の七法を受持すれば比丘は証果に登る、と禪的な説明がなされる。ことが知られる。また、一四節のdは、念佛による淨土往生の經説に対して、なぜ觀心解脱の法を得るかを説く独立の一節であるから、これまた一二節と一三節との間に入れることは不自然である。ちなみに、鈴木大拙氏が「悟性論」の五本対校に用いた敦煌本二種（p二五九五・竜大本）もまた、すべて五山版『三論』本の順序に等しく、その文脈の正しさを傍証している。

かくして、「破相論」に限れば、『六門』系統には大きな錯簡が存在するというべきであり、他本では大谷本のみがこれを踏襲する。大谷本が五山版『三論』と同文の三序を有し、しかも「任啓」と「任作哲」という重要な相違点をもつことは、すでにみた。したがつて、大谷本の性格は複雑であるが、五山版『六門』本の内容と、同じく『三論』本の形式とを合探した一本ではないかと思われる。むしろ、本邦中世において、達磨の語録をより正しいテキストに求めんとする禅者の苦心の足跡をとどめることに注意すべきであろう。

さて、③は天正一八年（一五九〇）の筆写本で、東北大学狩野文庫（禅籍目録に「北大」とあるのは誤記）に所蔵されるが、原本を調査の結果、本書は①の五山版に基づく、ほぼ忠実な謄写本であるから、ここで特記すべきものはない。

④は、同じく中世の古写本で、学界未紹介の河村孝道氏所蔵本（伊勢修成氏旧蔵本）である。本書は、線装袋綴で一冊。茶褐色で柿渋装の表紙と、扉（原装の表紙裏）とには「参禅学道書」と墨書きされ、第一紙（遊紙）裏にも「参禅学道書」悟性論  
破相論なる墨書きが存する。

本文は、四周单辺の匡郭内に、毎半葉八行一一字の大きな文字が、縦横ゆつたりと淨書される。全文に同筆の送りがなが存し、朱引・朱点（句読点と返り点）が施される。卷末には左記の墨書き語がみられる。

大事之本行条、聊爾他所置儀無用之。

慶長式年九月十二日（以下六字不詳）

右墨附七十七枚

右の識語の筆跡は、本文とは別手のごとくであり、したがつて、本書は慶長二年（一五九七）以前の室町期における古写本で、一名「參禪学道書」とも称された伝授本なることが知られる。

本書内容の、諸本に対する特徴は、「血脉論」序文中の相違、「悟性論」の序文がみられぬこと、「六門」本系統と最も遠い関係にあること、五山版に存する割行文字が若干存在すること、などの諸点である。

まず、「血脉論」序文中には、次のごとき重要な相違個所がみられる。

五山版・大谷本	河村本
惟有達磨血脉論、并伝心法要 二説、最為至論。	惟有達磨血脉論、最為至論。

すなわち、河村本には「并伝心法要二説」の七字がない。前に考えたごとく、この序文は任哲が紹興二三年（一一五三）に「血脉論」と『伝心法要』の二書を合冊開版した際における一文とすれば、右の七字はすでに『三論』合収書としては不要である。かくて、河村本は、この記事を意識的に削除し

てある古鈔本ではないであろうか。

また、河村本には「悟性論」の序文がみられぬ。もつとも、この序文は五山版と大谷本の『三論』のみに存在するに過ぎないが、いま注目すべきは、同じく序文をもたぬ金沢文庫所蔵の『悟性論』（文永一年八一二七四〇写本）のみに存する本文末尾の「三界所尊者謂之道方法同視者謂之門」という一文字が、河村本にもみえることである。さらに、河村本には、

右の一六字の直前に置かれる「夜坐偈」の第四句目が「何須生滅滅生渠」とあり、渠の字の欄外に本文と同筆で「滅、異本ニアリ」という貴重な書き込みがみられる。「生渠」が「生滅」とあるのは、数ある異本中、右の金沢文庫本のみである。

いittai、金沢文庫本『悟性論』は、前号の対校でも明らかなごとく、他本とは文字語句が大きく異なる独特的の異本であり、河村本との差異の程度は、五山版『三論』と河村本とのそれよりも甚だしい。したがって、右のごとき類似点をもつてのみ、河村本を金沢文庫本と近接の関係にあると断定することはできないが、「悟性論」のみは金沢文庫本系統の異本を参照していると考へよいであろう。しかし、こうした特徴をもつ反面、やはり河村本は五山版と最もよく一致する。五山版には多くの割行文字が存するが、その半ばは諸本中で河村本のみにみられる。ちなみに、河村本と最も遠いのは『六門』系統であることが、対校の結果知られる。かかる事

実は、河村本（またはその原本）が依った底本は、やはり五山版であり、その文字語句の誤脱等は、他の複数の異本によつて校訂されている古鈔と考えておきたい。ともあれ、ここにもまた五山版を校訂している態度が明瞭にうかがわれるのである。

次に、⑤の古活字版を検討しよう。本版は、川瀬一馬氏の『古活字版の研究』によれば、寛永年間（一六二四—一六四四）<sup>(11)</sup>の刊行とされる。大東急文庫の所蔵本は一冊で、近代の筆による「達磨血脉録 全」なる題簽が帖られる。刊記はなく、四周双边無界本で、一〇行二〇字の版式は、すでに五山版と異なる。もと、長州萩の正宗山洞春禪寺（現在、山口市所在、臨濟宗建仁寺派）の什物である。

本版を①の五山版と比較すると、「悟性論」「破相論」の両序がなく、逆に「悟性論」の末尾には「真性頌」、「破相論」の末尾には「我本求心心自持」等の七言八句の偈がそれぞれ存する。また、割行文字はすべて本行文字に改められ、無刻部分もきわめて少ないなどの顯著な相違がみられる。つまり、五山版の覆刻のごときものではなく、まったくの改版である。おそらくは、これも読み難い五山版の欠点を、『六門』の五山版などを参照にして、校正せんと努めた刊行本とみてよいであらう。

ここで、この古活字版と密切な関係にある正統藏經所収本

についてふれておきたい。この明治期の編集にかかる叢書中には、前掲の一覧表のごとく、第二編第一套第五冊中に「菩提達磨大師略弁大乘入道四行觀」「血脉論」「悟性論」「破相論」の四門を収め、続いて弘忍の『最上乘論』が置かれる。

冒頭の「四行觀」の問題は複雑なので後述することとし、次の、「血脉論」以下の三論は、例の対校の結果、古活字版の『三論』にほぼ完全に一致する。すなわち、從来不明であった統藏本の底本は、この三論については古活字版であることが判明したのである。ただし、統藏本には若干の誤植がある。

しかば、同じ統藏の冒頭に置かれる「四行觀」の底本はなにか。本書は、曇林の序と梁武帝の「達磨大師碑頌」とを前後に付録する特異な一篇である。周知のごとく、曇林の序をともなう「四行觀」（二種入）には、敦煌出土の『楞伽師資記』菩提達磨章と、伝統資料の『景德伝燈錄』卷三〇のものとがある。しかるに、前者の公開は統藏經編纂以後であり、また、後者には文中に三文字の異同が認められる。この異同文字は、筆者が目睹したいかなる『景德伝燈錄』の諸版においても同一であり、統藏のものとは異なる。そればかりではない。梁武帝の作品として付せられる「達磨大師碑頌」を、いつたい統藏本はどこから採録したのであらうか。この七言三〇句の小品は、目下のところ伝燈資料中に見いだすことができない。しかるに、近年に発見された『宝林伝』卷八の末尾

に、昭明太子の撰する達磨の祭文とともに、梁武撰の碑文が存し<sup>(12)</sup>、その文末にこの頌がみられる。もとより、右は続蔵の編者の閲知するところではないが、両者には二〇字ほどの文字の異同が存するので、これを対校し、△資料▽の二として小稿の末尾に掲げておいた。

続蔵本「四行觀」の底本を考える際、見のがせぬものに、近年大陸で刊行された単行書の存在がある。本書は、続蔵所収の「四行觀」以下の四門と『最上乘論』とが合冊され、民国二九年（一九四〇）に重慶華嚴寺の華嚴仏学院刊行の木版印刷本である。順序・内容ともに続蔵本とほぼ一致するが、わずかに「悟性論」末尾の真性頌のみを欠く。本書に『伝心法要』を合したもののが、一九七二年に台北の新文豐出版から影印刊行されているが、右の華嚴寺版は、おそらく続蔵本に基づいて印刻したテキストではないかと思われる。かくて、続蔵本「四行觀」の底本は、ついに見いだされない。『伝燈錄』卷三〇のものと、他本とを合揉編集して載録したものかも知れない。

ところで、続蔵の別の箇所に、すなわち、第二篇第一八套第五冊には、「心經頌」と「二種入」が收められる。続蔵の編者は、この二書が『少室六門集』からの抄録なることを明記する。しかるに、「二種入」は前掲の「四行觀」の本文部分であることに気づかなかつたのであらうか。明らかな重複とな

っている。かかる態度は、「安心法門」をあげて『六門集』から採録せずに、先の「四行觀」などと同帙に存する『諸方門人參問語錄』の附録のそれをもつて代替させていることと、はなはだしく矛盾し、続蔵編者の編集上の杜漸さを指摘されるところである。

なお、⑥の無著師の校訂本『少林三論』については、第五章において詳述する。

以上のごとく、『三論』の諸本を書誌的に検討すると、(2)以後の諸本は刊写の別なく、かならずテキストの補正校訂を試みていることが知られる。これは、いうまでもなく(1)の五山版が決して善本ではないこと、および、(1)のほかにもさまざまな叢書や単行資料が、少なからず流傳していたこと、などによる必然的な結果とみられる。そしてここに、三論ないしは六門個々の文献のもつ顯著な性格が看取されるのである。次に、上述以外の諸資料を、章を改めて考察したい。

#### 四 『禪門撮要』本と別行資料

『六門』中の個々の資料を含む叢書としては、『少室六門』と『達磨大師三論』のほかに、周知のごとく、近代に朝鮮の刊行にかかる『禪門撮要』がある。この叢書の現存する諸版としては、左記のものがある。

① 隆熙元年（一九〇七）刊、慶昌北道虎踞山雲門寺、二卷

## 二冊（花園大、駒大）

- ②昭和三四四年（一九五九）孔版、二冊、花園大刊  
 ③近年刊、ソウル市、宋法日、国漢文訳本  
 ④一九六八年刊、金井山梵魚寺、『新刊懸吐禪門撮要』  
 ⑤一九七四年刊（影印）、京都中文出版、『禪學叢書』之二

## 所収

まず①は、上下二冊で一五種の中国・朝鮮の重要な禪籍を収め、学道者に禪の枢要を学ばしめるためのテキストである。就中、中國関係の禪籍の大部分は、すでに光緒九年（一八八三）に編集開版された『法海寶筏』<sup>(13)</sup>に依るものという。②は①の覆刻、⑤も①の影印であり、これらによつて本書は容易に見られることとなつた。

本書は、六門中の「血脉論」、「觀心論」（破相論）、「達磨大師四行論」、の三書を巻上に収める。このうち、前二書については例の対校によつて知られるごとく、他の諸本に比較して、文字語句の異同がはなはだしい。特にそれは「觀心論」について著しく、分量的にも最大となつてゐる。しかしながら、鈴木氏の「五本対校觀心論」をみると、分量の多さは、この『撮要』本よりもはるかに古い敦煌本類の方が、むしろ顕著である。一方、『撮要』中の「四行論」は、いわゆる「二種入」に該当する「第一入道修行綱要門」以下、第四四門までを存し、これら全体が、やはり敦煌本の『二入四行論』に

該當するものである。かくして、『撮要』本の内容は、実は古資料をかなり忠実に伝えていることが推察され、前記分量の多さも後代の加筆とみるよりは、むしろテキストの原初型態に近い未整理本の姿を伝承する、価値ある資料とみるべきであろう。

次に、③は①の一五種より「觀心論」「修心訣」「血脉論」「真心直説」「博山警語」の五種を抄出し、これに朝鮮撰述の「蒙山法語」等の五種を付して初学者に提供した一書である。刊行年時は不詳ながら、この種の刊本は、近代の半島においてまだ少なからず存するにちがいない。

また、④は近年の諺文訓点本であるが、①の一五種に六種を加えて、合計二一種を収める。就中、当面の六門関係では、新たに「般若心経」（実は心經頌）と「悟性論」の二書が加えられているのが注目をひく。①に存せぬからには、他に半島で別行していたものを加えたのであらうか。これらの二書と、従来本との間の文字の異同状態も、これまた独特である。特に、「心經頌」は従来『六門』本のほかに知られぬ点で、資料的価値は大きい。こうした観点から、小稿の附録に、「心經頌」の対校をへ資料▽の一として掲載することとした。

さて次に、上記の叢書以外における六門個々の資料の所在を整理し、いささか問題点などを指摘しておきたい。順序は、

便宜上『少室六門』の収録順に準ずる。

まず、第一門の「心經頌」は、別行の資料は皆無である。

いうまでもなく、本書は玄奘訳の經典に対する付頌であるが、内容的にはすこぶる古色を帶び、安國淨覺・南陽慧忠・資州智詵の作品とともに、初期禪宗における心經の古注の一つである。達磨の作ではありえぬことから、從来、本書に対する関心は低い。しかし、本書は数ある心經の末疏中、經典本文の科段の分け方が、敦煌出土の淨賞撰、『註般若波羅密多心經』とのみ完全に一致するという事実がある。また、唯識的用語の頻出、南宗禪の思想語句の存在などにより、筆者は、本書は元來北宗で撰述されながら、後に南宗的に改作された一書と推定するものである。ともあれ、本書はまずテキスト研究が先行されなければならない。

次に、第二門の「破相論」は、前掲の『撮要』本では「觀心論」、敦煌本では多くの異称が存するが、北宗神秀（六〇六？—七〇六）の撰述なることは、すでに斯界の常識である。目下知られる單行資料を左記に掲げておこう。なお、以下の敦煌資料については、田中良昭氏の「敦煌禪宗資料分類目録初稿」<sup>14)</sup>による。

- ① S 二五九五 ② S 五五三二 ③ P 一四六〇 ④ P 一六五七
- ⑤ P 三七七七 ⑥ P 四六四六 ⑦ 『觀門大乘法論』（竜谷大）
- ⑧ 建仁元年～一二〇一▽写本、大甫丸筆、『達摩和尚觀

心破相論』（金沢文庫）⑨建長四年～一二五一▽写本、夜叉王

丸筆、同上書名（金沢文庫、同文庫資料全書仏典第一卷禪籍篇△一九七四▽所収）⑩古写本（金沢文庫）⑪隆慶四年～一五七〇▽重刊、朝鮮安心寺（薑園叢書△一九三四▽）、中国哲学思想要籍叢編△一九七五▽、各所収）⑫写本（京大）

右の諸本中、①～⑦は敦煌本、⑧～⑩は金沢文庫所蔵の古写本である。鈴木氏の五本対校は、①⑦⑨と前述の『撮要』本と、流布本の『六門』本、とによつてなされている。また、⑪の隆慶四年重刊本は、天順七年（一四六三）安心寺刊本の重刻であるが、薑園叢書等に收めるものは、これを①と対校した校本である。さらに、前記金沢文庫本のうち、⑨の古写本は五山版『三論』中のものと近接した関係にあることが注目され、⑩は最近に同文庫で発見された新出資料であり、⑧（15）は『仏書解説大辭典』の所載であるが、「悟性論」「血脈論」とともに同じ京都大学の分類番号をもつところから、おそらくは正統藏經所収の『三論』の原稿資料であろうと思われる。

「破相論」（觀心論）の今後の課題としては、右によつても明らなごとく、総合的なテキストの比較対校がなされなければならない。また、本書は觀心思想の究明とともに、初期禪宗における仏事・儀礼等の実践的方面を知るべき貴重な資料が提供されているので、これも活用すべきであろう。

第三門の「二種入」は、いわゆる達磨の「二入四行」として著名であり、敦煌出土の多くの『二入四行論』(菩提達摩論・菩提達摩四行論、等) の首部に相当する。別行資料は左記の(1)とく、すゝぶる多い。

- (1) S一二七一五 (2) S三三三七五 (3) S七一五九 (4) P二九二
  - 三 (5) P三〇一八 (6) P四六三四 (7) P四七九五 (8) 北京本、宿九九 (9) 『楞伽師資記』<sup>16)</sup> 七一六頃(16) >達磨章中(T.85)
  - (10) 『景德伝燈錄』<sup>17)</sup> 一〇〇因(17) >卷三〇 (T.51) (11) 『仏祖歴代通載』<sup>18)</sup> 一三三四(18) >卷九 (Z.2 Z.5-2) (12) 『菩提達摩四行論』天順八年(1464) >朝鮮刊、重修本 (天理図) (13) 『禪海十珍』<sup>19)</sup> 一六八七(19) >所収 (Z.2,31-1) (14) 写本 (京大)
- 右の諸本中、(1)~(9)は敦煌資料で、(12)は唯一の単行刊本である。また、(14)は前述の「破相論」と同じく、続蔵本の原稿であろう。なお、以上のほかにも、『続高僧伝』(六四五) 卷一六の達磨章には抜要が存し、『宗鏡錄』九七等にも引文がみられる。本書を含む『二入四行論』は、初期禅宗資料中、最重要の地位にあり、最大の研究成果は、いうまでもなく柳田聖山氏の『達摩の語録—二入四行論—』である。
- 第四門の「安心法門」は、短篇なために合収されて伝えられたものが多々。左記の(1)と別行資料がある。
- (1) 『宗鏡錄』<sup>20)</sup> 九六一(20) >卷九七 (T.48) (2) 大慧『正法眼藏』中(Z.2,23-1) (3) 『諸方門人參問語録』附 (Z.2,18-5) (4) 聯

『少林六門』と『達磨大師』(論) (椎名)

『燈會要』<sup>21)</sup> 一八三(21) >卷一七 (Z.2 Z.9-5) (5) 宝町中期写本 (六地藏寺) (6) 天文五年(1536) >写本 (滋賀正教坊)

右の諸本中、(1)~(4)は合収書、(5)(6)は古鈔本である。また、本書が前掲の『二入四行論』中からの抜萃であることを最初に指摘されたのは鈴木大拙氏であるが、その意味では、前掲『二入四行論』のすぐとも間接資料である。ほかにも、合収されるものが存するであろう。

第五門の「悟性論」は、左記の別行資料三点が知られる。

(1) 文永一年(1274) >写本 (金沢文庫) (2) 『菩提達摩悟性論』文永一年写本 (積翠軒文庫旧蔵) (3) 写本 (京大)

右のうち、(1)は筆者が前号で対校に用いたが、他本に比して文字の異同が最も著しいものであった。特に、末尾に独特の語句五七字を存し、内容的に後代に潤色されている傾向をうかがわせるものである。奇しくも(1)と同時期の筆写である(2)は、目下その所在が知られぬことは遺憾である。(3)は前述の(1)とく、続蔵本の原稿であろう。

なお、本書は、古く円珍の『入唐求法目録』(八三九) に「達摩和上悟性論一卷未詳」<sup>22)</sup> とみえ、『智証大師将来目録』(八五四) にも「達摩和尚悟性論一卷」<sup>23)</sup> とあって、本邦伝来の古文を示す。さらに、後述する無著道忠の『少林三論并四品校讎』中には、「悟性論」の対校本として「雜華院所蔵の唐の古本」を明示するから、雜華院(臨済宗妙心寺派)にも未知の

「悟性論」が存したことが知られる。

第六門の「血脉論」は、わずかに左記の二点のみが知られる。

- ①『達磨大師血脉論』、隆慶年間～一五六七～七三▽刊、朝鮮安心寺 ②写本（京大）

右の①は、神尾式氏の前掲論文に所説される単行書であるが、目下その所在は不詳である。②は続蔵本の原稿とみられるもの。なお、本書は『東福寺普門院経論章疏語錄儒書等目録』（一三五三）中にもみられ、中世初期には将来されていたことが知られるが、刊写の別や『三論』との関係については不詳である。今後、本書の古資料の出現が望まれるところである。

## 五 『少室六門』と『達磨大師三論』

上述の検討で明らかなどく、六門の書誌は、かならずしも単純ではない。それは、六門の個々の資料における基本的性格に帰因することは、すでに述べたとおりである。ともあれここでは、複雑な『六門』と『三論』の諸本間の系統を、より闡明にするために、欠くべからざる無著道忠師の業績を、改めて考察しておきたい。

無著の学問的成果は、『少林三論』と『少林三論并四品校讎』という二冊の自筆書によつて知られる。前者は竜華院、

後者は北苑文庫の所蔵であるが、ともに『禅学叢書』第二巻中に影印収録されて、学界を益している。ところで、前者は『達磨大師三論』の校訂本を淨書した定稿であるが、後者はただこの校訂の内容を示すだけの単純な著作ではない。

後者の内容は、まず「観心論」（書名の下に細注で「南涌本・朝鮮ノ刊 方山ノ本ハ書スル者」とある）「血脉論」「最上乗論」の三書の校讎の詳細に記録され、これに続き左記の識語が存する。

享保甲寅（一七三四）の冬、達磨の「観心論」「血脉論」と五祖の「最上乗論」とを一冊となすを観る。朝鮮の刻本にて、南涌院にあり。借り得てこれを写す。「観心論」はすなわち「破相論」なり。二論、これを『六門』の旧刊と校するに、大いに文字の増減ありて、「血脉論」に序なし。それ、「最上乗論」は、正徳六年丙申（一七一六）、丹波瑞巖寺の刊行せるゆえに、贋写を須<sup>む</sup>いす。

享保乙卯（一七三五）正月、また「観心」「血脉」「最上乗」を視る。これ、昔竜安（寺）養華院の方山が手写せるものなり。「血脉論」に任哲の序あり。前年、伯瑛の示すところの本の序と全同なり。

（原漢文、禪學叢書之二、p.211b）

すなわち、本書卷頭の校讎は、無著が享保一九年（一七三四）に見た南涌院所蔵の珍貴な朝鮮刊本を、旧刊の『六門』との間に行なつたものの記録である。彼のいう「旧刊」とは、校讎本文を精査すると、江戸期の流布本であることがわかる。つまり、無著は『六門』の五山版の存在は知らない。また、

彼が翌年閲した万山の書写本は、右の朝鮮本とは同じ構成ながら、「血脉論」には序文が付されるという相違点があつたことがわかる。なお、伯瑛の示した一本とは、朝鮮版ではなく、後述の高麗版を意味する。

さて次に、本書には「血脉論」(書名の下に細注で「天竜三会」古刊、三論之第一」とあり)、「悟性論」(同じく「三論之第二」)、「悟性論」(細注「与雜華院唐古本対校 無序」)、「破相論」(同「天竜三会古刊 三論之第三」)、の順序による校讎が存し、これに続き次の識語がみられる。

右の『達磨三論』は、前の妙心(寺)広山和尚、天竜(寺)三会院の刊するところの本によりて、親しくこれを写す。南涌院にあり。院主の蒙山座元、余に示す。余、借り得てこれを賸す。元本の訛差、義を成さず読むべからざるは、余、『六門集』に載するところ、及び朝鮮の雕本の「観心論」「血脉論」と対校して字を改め、あるいは補入す。別に『校訛』一本を作りて、その補正の意を録す。……(中略)……

享保二十年乙卯(一七三五)二月初七日謄を始め、二十六日功を畢り元本を還す。

天竜の古刊本を天竜寺に搜索するも、これを獲ず。

元文四年己未(一七三九)三月、書家、天竜の古刊本を持し來り贈られ、これを得。

(同、226a~b)

この一連の識語により、無著の淨書本『少林三論』こそは、妙心寺広山和尚が五山版『三論』から謄写せるものを底本とし、これを『六門集』と前記の朝鮮刊本とによって校訂した定稿なことが知られる。そして、その校訛の詳細記録が、右にあげた『三論』の校讎にほかならない。無著は、校訂本作成後も、原本の五山版を探索し、ついに四年後の元文四年に至つてこれを入手している。もつて、善本探求に対する彼の真摯な態度を憶うべきである。

彼の業績は、これのみにとどまらぬ。本書には、引続ぎ「達磨血脉論序」「菩提達磨悟性論序」「達磨大師破相論序」の三序が淨書され、これらに関する次の識語を置く。

昔年、興聖寺の伯璞和尚、『達磨三論』を携え来りていわく、余、これを影りて流通せんと欲す。請う、和尚の弁言を作さんことを、と。『三論』は、すなわち「血脉論」「悟性論」「破相論」にして、高麗本なり。各序あり。余、たまたま長州への行ありて、書を留め、刊行の『六門集』と対校することを得ず。ただ、三書の序を写して返璧し、長(州)より帰りて相議らんことを約す。その後、伯璞は遷化し、『三論』はいざこにあるやを識らず。はなはだ遺憾というべきかな。右に録するところの三序はこれなり。

(同、229a)

以下、本書は『六門』の目録、その他の雑記で終る。しかし、右の識語により、先にいう享保十九年(一七三四)に伯璞の呈示した『三論』とは、実に高麗刊本なることを知る。

この奇代の逸書は、惜しむらくは伯璞の遷化により所在を没した。しかしに、幸いにも無著により贊写されていた三序をみると、まさしく五山版『三論』のそれと、順序・内容ともに全同である。毎行二〇字の書式もまた等しい。これらの注目すべき一致点は、『三論』の高麗版と五山版とが、同文異版の関係にあることを推定せしめるに充分であろう。このことはまた、五山版が麗版の覆刻<sup>(20)</sup>であるか、または麗版の原本たる宋版からのそれであるかの、いずれかの可能性を示唆するものである。

かくして、現存するいかなる宋元代の書目にもみられず、いかなる関説記事もみられぬ幻の宋版『三論』が、幻ではなく現実に存在したのかも知れない。とすれば、その編集時期は、少なくとも「血脉論」の序文が成った紹興二三年（一一五三）よりも後であることだけは確かである。

注目すべきは、この宋版『三論』が、意外に早く本邦に影響を及ぼしていることである。栄西や道元以前、摂津吹田の三宝寺を中心に、大日房能忍を盟主として畿内道俗の帰依をえていた日本達磨宗において、本書は重要なテキストとして依用されていたようである。すなわち、道元の法孫たる経豪の『正法眼藏抄』（通称『御抄』）の画餅巻の注疏の部分には、次の語句がみられる。

達磨宗ニハ、破相論、悟性論、血脉論トタテテ、マツ世間ノ法ヲ

破シテ、正ヲサトルト云ハ、ステニ測度ナルヘシ<sup>(21)</sup>

『御抄』がここで批判する達磨宗の唯心的立場の是非は、草創期の曹洞教団と達磨宗との密切な関係からして、はなはだ興味をそそるが、そのことはいま問わぬ。問題とすべきは、あえて“達磨宗”を名乗る人々が、当然その教理的思想的基本盤の一つとして求めたであろう達磨の教説が、おそらくは『三論』であったと思われることである。

知るごとく、達磨宗の最盛期は十二世紀末葉であり、建久五年（一一九四）にはその布教が禁止される。<sup>(22)</sup> ゆえに、『御抄』

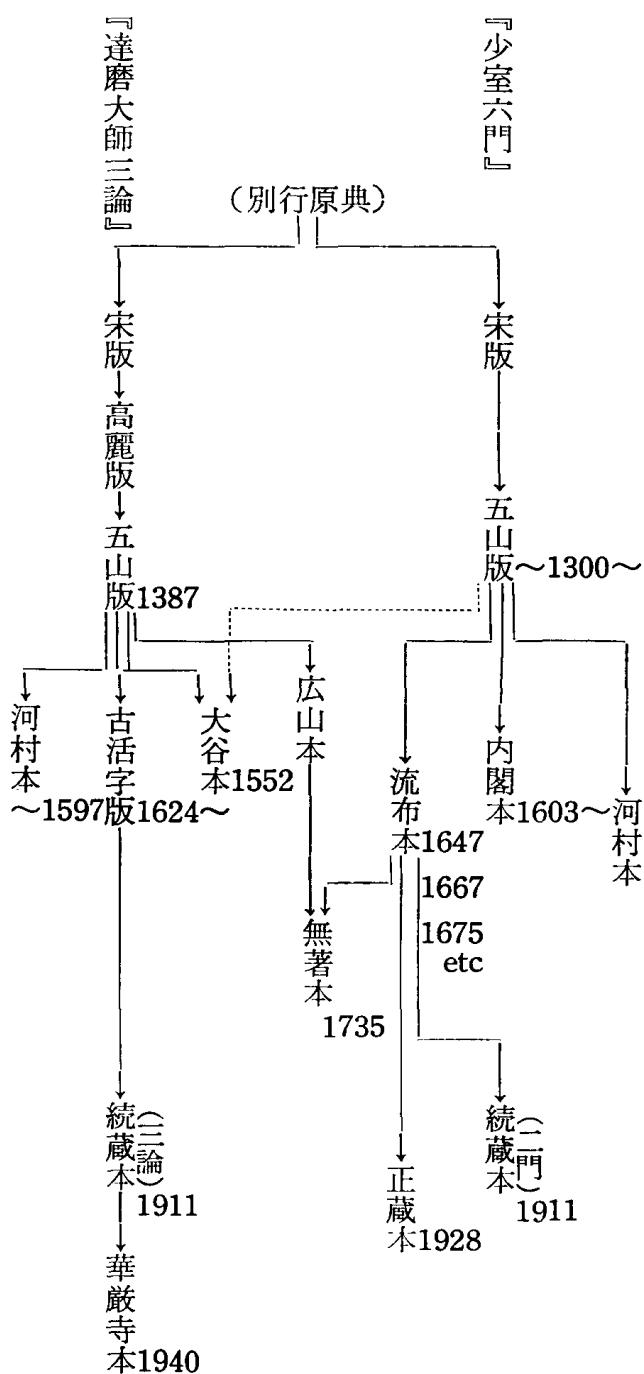
の批判は、建久五年以前の状態を指すとみてよい。しからば、前述の紹興二三年（一一五三）の後に編集されたとみられる『三論』の宋版（または贊写本）が、間もなく本邦に将来され、達磨宗の関心を呼ぶ典籍とされたのではないであろうか。

金沢文庫には、達磨宗の実践教理を伝える『成等正覺論』<sup>(23)</sup>なる貴重資料をはじめ、他にみられぬいくつかの関係資料を現存する。<sup>(24)</sup> 同文庫の『見性成仏論』<sup>(25)</sup> や『宗鏡錄要処』<sup>(26)</sup> 等の古鈔類もまた、達磨宗との関係から考察せられるべきである。したがつて、先にみた同庫の「破相論」三種、「悟性論」一

種の古写本類の存在は、単なる偶然の所蔵とはいえないであろう。『三論』と達磨宗との関係が密切であれば、ここにもまた、何らかの隠された事実がひそんでいるのではないであらうか。今後の解明がまたれるところである。

以上、所論は多岐にわたったが、上述したところに従つて、『六門』と『三論』の諸本の系統を、現況において図示しておこう。最後に、これら二書に関する今後の課題についていいうならば、六種の文献個々についての定本の作成が必要であろう。ちなみに、もともとまったく別個に撰述された六種の

文献を、後に便宜上編集した『六門』や『三論』そのものの定本化は、もはや資料的には無意味であることはいうまでもない。次に、右の定本化をふまえて、新たな訳注がなされるべきであろう。これらの仕事は、必らずしも容易ではないが、それだけの価値ある文献であり、またその過程において、初期禪宗思想の解明に対して、大きな功献をなすであろう。



- |   |  |
|---|--|
| 1 | 『江戸時代書林出版書籍目録集成』によれば、寛文一〇年・<br>一二年、延宝三年、天和元年、元禄五年・一二年、等の刊行を<br>記録し、これに後述の正保四年、寛文七年、及び何本かの無刊<br>記本が加わる。 |
| 2 | 「観心論私考」(宗教研究、新九一五)<br>「竜谷学報」三〇九  |
| 3 | 『大日本佛教全書』旧版 1—277a   |
| 4 | 「達摩△観心論△」(破相論) 五本対校」(校刊少室逸書解説<br>5   |

附録、達摩の禅法と思想及其他、第一[篇]

△禪の語録1▽『達摩の語録一入四行論』p. 18

7 『江都督納言文集』附録「発刊の由来」

8 阿部隆一「六地蔵寺法寶藏典籍について」(斯道文庫論集五)、川瀬一馬『五山版の研究』p. 397a

9 『内閣文庫漢籍分類目録』凡例 p. 3~4

10 川瀬氏前掲書、第三章第二節、臨川寺版と春屋妙葩の開版

11 川瀬氏『古活字版の研究』上 p. 368

12 『禪学叢書』五、p. 142

13 柳田聖山「禪籍解題」(世界古典文学全集36B附録、p. 451b)

14 「観心論」の目録は「駒大仏教学部研究紀要」二九号、「11  
入四行論」は同三四号、による。

15 金沢文庫技師、高橋秀栄氏の御教示による。

16 『禪思想史研究第一』(鈴木大拙全集1) p. 118~122

T.55—1106b

17 T.55—1106a

昭和法宝総目録 3-969c

18 長沢規矩也氏は五山版を定義して、「鎌倉・室町時代に、五

山を中心に禪僧によって出版された、宋元明・朝鮮刊本の覆刻本及び宋元版の様式を備えた刊本」といふ。〔図解和漢印刷史△解説篇>p. 29b)

21 『永平正法眼藏蒐書大成』一二、p. 330

22 『百練抄』一〇(国史大系一四、p. 164)

23 25 『金沢文庫資料全書』仏典第一巻禪籍篇、所収書及び解

題参照。なお、石井修道「仏照徳光と日本達磨宗—金沢文庫保

管『成等正覓論』をてがかりとして一上・下(金沢文庫研究二〇—一一~一一)をも参照。

24 高橋秀栄「大日房能忍と達磨宗に関する史料」(1)(2)(金沢文庫研究二二一四、二二一七・二二一一合) 参照。

## △資料▽

### 一、心 經 頌

[底本] 『少室六門』五山版、中世初期刊、茨城県六地蔵寺蔵。底

[校本] 1 『新刊懸吐禪門撮要』本、一九六八、梵魚寺刊。底

2 『少室六門』江戸初期写本、内閣文庫蔵。底

3 『同』右』江戸期写本、河村孝道氏蔵。底

4 『同』右』江戸初期刊本、駒岡忽一(1671~1731)忽

5 『同』右』大正蔵経本、T.48-365a~366c。正

### 摩訶般若波羅蜜多心經

\* 蜜一密門

頌曰\*

\* 頌曰一ナシ門忽正、以下同シ

智慧清淨海。理密義幽深。

\* 慧一惠肉門

波羅到彼岸。向道祇由心。

\* 祇一只門

多聞千種意。不離線因針。

\* 意一義門

經花絲一道。萬劫衆賢欽。

\* 花一華門 \* 絲一糸門、糸正

觀自在菩薩

頌曰

菩薩超聖智。

六處悉皆同。

\* 聖一勝門

心空觀自在。無闇大神通。 \* 開一碍門

禪門入正受。三昧任西東。

多方遊歷遍。不見仏行蹤。

\* 遍一辺門 \* 仏一不門

行深般若波羅蜜。多時頌曰

\* 蜜一密門内

六年救大道。行深不離身。

智慧心解脫。達彼岸頭人。

\* 慧一惠門

聖道空寂寂。如是我今聞。

仏行平等意。時到自超群。

照見五蘊皆空。頌曰

\* 蘊一蘊門

貪愛成五蘊。假合得為身。

\* 蘿一蘿門 \* 得十者不門

血肉連筋骨。皮裏一堆塵。

\* 著一着門內門忽

迷徒生樂著。智者不為親。

四相皆皈尽。呼甚乃為真。

度一切苦厄。頌曰

\* 苦一苦門

妄繫身為苦。人我心自迷。

\* 著一著門內門忽

涅槃清淨道。誰肯著心依。

\* 聞一問門

陰界六塵起。厄難業相隨。

\* 聞一問門

若要心無苦。聞早悟菩提。

\* 聞一問門

舍利子。頌曰

\* 道一ナシ門

達道由心本。心淨利還多。

\* 心本一本心門

如蓮華出水。頓覺道源和。

\* 華一花門

常居寂滅相。智慧衆難過。

\* 慧一惠門

\* 過一至門

獨超三界外。更不恋娑婆。 \* 獨一猶門

色不異空空不異色。頌曰

色与空一種。未到見兩般。

二乘生分別。執相自心謾。

空外無別色。非色義能寬。

無生清淨性。悟者即涅槃。

色即是空空即是色。頌曰

非空空不有。非色色無形。

\* 色一ナシ門

色空同皈一。淨土得安寧。

非空空為妙。非色色分明。

色空皆非相。甚處立身形。

受想行識亦復如是。頌曰

受想納諸緣。行識量能寬。

偏計心須滅。我病不相忏。

\* 偏一辺門、遍內門

解脱心無碍。破執悟真源。

\* 忏一千門忽、于正

故云亦如是。性相一般般。

\* 真一心內門正

舍利子。頌曰

說舍論身相。利言一種心。

菩薩金剛力。四相勿令侵。

達道離人執。見性法無音。

\* 捺一總正、惣內忽

諸漏皆捺盡。徧體是真金。

\* 徧一辺門、遍忽正

是諸法空相。

頌曰

諸仏說空法。聲聞有相求。

尋經覓道理。何日學心休。

\* 覓—覓河

圓成真実相。頓見罷心修。

\* 覓—覓河

迴然超法界。自在更何憂。

\* 回—迴門忽正 \* 憂—優門

不生不滅。頌曰

\* 捏—總門正、惣內河

盧舍清淨體。無相本來真。

\* 偏—邊門、遍內正 \* 萬—萬內

如空皆揔偏。萬劫體長存。

\* 着—箸門、著正

不共皆不着。無旧亦無新。

\* 着—箸門、著正

和光塵不染。三界獨為尊。

\* 着—箸門、著正

不垢不淨。頌曰

\* 着—箸門、著正

真如越三界。垢淨本來無。

\* 着—箸門、著正

能仁起方便。說細及言龜。

\* 是—示門

空界無有法。是現一輪孤。

\* 呼—乎門

本來無一物。豈合兩般呼。

\* 呼—乎門

不增不減。頌曰

\* 呼—乎門

如來體無相。滿足十方空。

\* 容—空門

空上難立有。有內不見空。

\* 容—空門

看似水中月。聞如耳畔風。

\* 容—空門

法身何增減。三界号真容。

\* 容—空門

是故空中。頌曰

\* 間—聞忽正 \* 覓—覓河

菩提不在外。中間覓也難。

\* 間—聞忽正 \* 覓—覓河

非相非非相。量測失機關。

\* 也—他門 \* 非非—々河

世界非世界。三光照四天。  
本来無障闥。甚處有遮欄。

\* 世—無河  
\* 闥—碍門

無色無受想行識。頌曰

\* 無—无內  
\* 却—劫河

無色本來空。無受意還同。  
行識無中有。有尽却皈空。

\* 却—劫河

執有實不有。依空又落空。

\* 耳—意門

色空心俱離。方始得神通。

\* 耳—意門

無眼耳鼻舌身意。頌曰

\* 聲—香門 \* 談—詠門忽正

六根無自性。隨相與安排。

\* 聲—香門 \* 論—詠門忽正

色分緣聲響。人我舌談譖。

\* 聲—香門 \* 論—詠門忽正

鼻或分香臭。身意欲情乖。

\* 聲—香門 \* 論—詠門忽正

六處貪愛斷。萬劫不輪回。

\* 万—萬門河正 \* 回—廻門迴正

無色聲香味觸法。頌曰

\* 觸—觸門

証智無声色。香味觸陀誰。

\* 觸—觸門

六塵從妄起。凡心自惑疑。

\* 陀—他門正

生死休生死。菩提証此時。

\* 陀—他門正

法性空無住。只恐悟陀遲。

\* 陀—他門正

無眼界乃至無意識界。頌曰

\* 陀—他門正

六識從妄起。依陀性自開。

\* 陀—他門正

眼耳兼身意。誰肯自量裁。

\* 却—劫河

舌鼻行顛倒。心王却遣回。

\* 却—劫河

六識中不久。頓悟向如來。

\*無無明亦無無明尽乃至無老死  
亦無老死尽

頌曰

\*無一无内

十二縁因有。生下老相隨。

\*縁因一因縁門河忽正

有身無明至。二相等頭齊。

\*無一无内、以下コノ頌同ジ  
却一劫河

身尽無明尽。受報却來期。

\*却一劫河

智身如幻化。急急悟無為。

頌曰

無苦集滅道

四諦興三界。頓教義分明。

苦斷執已滅。聖道自然成。

声聞休妄想。緣覺竟安寧。

欲知成仏處。心上莫留停。

\*知一智門

\*停一惜門

無智亦無得。頌曰

\*無一无内

\*慧一惠内河

法本非無有。智慧難測量。

\*無一无内

\*慧一惠内河

歡喜心離垢。發光滿十方。

\*前現一現前門

難勝於前現。遠行大道場。

\*前現一現前門

不動超彼岸。善慧法中王。

\*慧一惠内河

以無所得故。頌曰

寂滅體無得。真空絕手攀。

\*無一无内

本来無相貌。權且立三檀。

\*無一无内

四智開法喻。六度号都閑。

\*無一无内

十地三乘法。衆聖測佗難。

菩提薩埵

頌曰

\*佗難一難他門、他難正

仏道真難識。薩埵是凡夫。  
衆生要見性。敬仏莫心孤。

世間善知識。言論法細龐。

頓悟心平等。中間有相除。

依般若波羅蜜多故。頌曰

般若言智慧。波羅無所依。

心空性廣大。内外盡無為。

性空無碍辯。三界達人稀。

大見明大法。皆讚不思議。

心無罣碍。頌曰

解脫心無闇。意若太虛空。

四維無一物。上下悉皆同。

來往心自在。人法不相逢。

訪道不見物。任運出煩惱。

無罣碍故無有恐怖。頌曰

生死心恐怖。無為性自安。

境忘心亦滅。性海湛然寬。

三身帰淨土。八識離因縁。

六通隨實相。復本却還源。

\*通一道河 \*却一劫河

遠離顛倒夢想。頌曰

\*離一内・一切河忽正

二邊純莫立。中道勿心修。

\*純一絕門

見性生死盡。菩提無所求。

\*無一无内

身外覓真仏。顛倒一生休。

靜坐身安樂。無為果自周。

\* 無一无内 自一同河

四智波無尽。八識有神威。

心灯明法界。即此是菩提。

\* 灯一燈門河忽正

空竟涅槃

頌曰

究竟無生性。清淨是涅槃。

凡夫莫測聖。未到即應難。

\* 即一則門

摩訶三界主。願廣起慈悲。

\* 悲一ナシ河

有學却無學。仏智転深玄。

\* 却一及門、劫門

能順衆生意。隨流引化迷。

\* 超一起門內河正

要會無心理。莫著息心源。

\* 著一着河忽 \* 息一識門

人人超彼岸。由我不由伊。

\* 超一起門內河正

三世諸仏

頌曰

過去非言実。未來不為真。

現在菩提子。無法号玄門。

\* 版一故門 \* 遍一辺門

佛道成千聖。法力更無過。

真空滅諸有。示現化身多。

\* 見一ナシ河 \* 無一无内

三身同版一。一性遍含身。

\* 版一故門 \* 遍一辺門

來為衆生苦。去為世間魔。

\* 德一徳門

達理非三世。一法得無因。

\* 蜜一密門内

劫石皆版盡。唯我在娑婆。

\* 寂滅心中巧

三藐三菩提

頌曰

仏智深難測。慧解廣無邊。

\* 測一量門 \* 慧一惠門河

弘法談真理。普勸急修行。

\* 德一徳門

無上心正徧。慈光滿大千。

\* 無一无内 \* 徧一辺門、遍一忽正

回心見實相。苦盡見無生。

\* 見一ナシ河 \* 無一无内

寂滅心中巧。建立萬余般。

\* 萬一万河

永息三惡道。坦蕩樂轟轟。

\* 轟轟一袁袁門、裏裏正

菩薩多方便。普救為人天。

\* 救一求門

故說般若波羅蜜多呪。頌曰

\* 蜜一密門内

故知般若波羅蜜多是大神呪是

\* 蜜一密門内

大明呪

頌曰

般若為神呪。能除五蘊疑。

\* 蘊一蘊門

煩惱皆斷盡。清淨自分離。

即説呪曰 竭諦<sup>\*</sup> 竭諦波羅竭諦<sup>\*</sup> \* 誦—提門、以下同シ  
 羅僧竭諦菩提薩婆訶 頌曰 \* 僧—ナシ<sup>回</sup> \* 薩—ダム<sup>回</sup>

竭諦本宗綱。扶機建法幡。

如來最尊勝。凡心莫等量。

無邊無中際。無短亦無長。

般若波羅蜜。萬代古今常。

\* 尾題「般若心經 終」門、ナシ<sup>回</sup>  
 \* 蜜—密門内 \* 萬一方内<sup>回</sup>

摩訶般若波羅蜜多心經

無去無來無是非。彼此形骸心碎裂。  
 住焉去焉皆帰寂。寂内何曾有哽咽。  
 命之執乎以伝燈。生死去來如電掣。  
 若能志誠心不退。劫火焚然斯不滅。  
 一真之法尽可有。未寤迷徒玆是謁。  
 焚然—燃燈 寞—悟  
 徒—途 謁—竭

## 1、「達磨大師碑頌

〔底本〕『宝林伝』卷八達摩章、禪學叢書之五、p.142a~b

〔校本〕『正統藏經』本、1,2,15,5-404c~d

楞伽山頂生寶月。中有金人披縷褐。 生一坐 月一日

形同大地体如空。心若瑠璃色如雪。 若一如

匪磨匪瑩恒淨明。披雲卷霧心且徹。

勞陀利花用嚴身。隨緣触物常歡悅。

不有不無非去來。多聞弁才無法說。

實哉空哉離生有。大之小之著緣絕。

刹那而登妙覺心。躍鱗慧海起先哲。

理應法水永長流。何期暫涌還復竭。

驪龍珠內落心燈。白豪慧刀當鋒缺。

生途忽焉慧眼閑。禪河駐流法梁折。

暫—通  
 涌—通  
 夷—缺

※本誌前号の拙稿、及び本稿をなすに当り、貴重な資料を提供され、また閲覧を許可された各位の御芳名を左に記し、甚深の謝意を表します。

六地蔵寺、大谷大図書館、駒大図書館、東北大図書館、金沢文庫、大東急記念文庫、内閣文庫、河村孝道氏、田中良昭氏、高橋秀栄氏